

中国語・タガログ語を母語とする日本語学習者のナラティブ発達

—日本語母語話者との比較—

鈴木 一徳・浅野 明代・平川 眞規子

Narrative Development in L2 Japanese by L1 Chinese and Tagalog Speakers :

A Comparison with Native Japanese Speakers

Kazunori Suzuki, Akiyo Asano, Makiko Hirakawa

This study examines oral narratives by young learners of Japanese in order to clarify their narrative abilities and developmental progress. Three native Chinese speakers and three native Tagalog speakers participated in the experiment. They were junior high school students in Japan. The participants were asked to tell a story in Japanese, based on a picture storybook, *Frog, where are you?* (Mayer, 1969). Their speech data were transcribed by using JCHAT, Japanese version of CHILDES (Oshima-Takane & MacWhinney, 1995). Then they were analyzed in terms of MLU, narrative construction (Minami, 2004), and how topics were introduced and maintained with regard to “discourse markedness” (Chaudron & Parker, 1990) in their story telling. Results show that development on MLU and on narrative construction for describing Action and Evaluation of the story were observed only for the L1 Chinese group. Furthermore, the L2 Japanese learners were able to distinguish between discourse contexts, acquiring the least marked structural forms earlier than more marked ones. As for the L1 Chinese, they were able to use appropriate linguistic forms in each discourse context after the overgeneralization of zero anaphors.

* 本稿は、2014年6月28日（土）に文教大学越谷キャンパスにて開催された、第16回言語科学会年次国際大会（The 16th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences: JSLS2014）でのポスター発表（タイトル「日本語の母語話者および第二言語学習者のナラティブ発達に関する一考察」）の内容をもとに、加筆・修正を施したものである。

1. はじめに

本論文では、中国語・タガログ語を母語とする日本語学習者（中学生）を対象に、日本語のナラティブ（narrative）の発達に関する縦断的研究を通して、その発達過程の一端を明らかにすることを目的とする。Labov（1972）では、ナラティブは、「時間的に異なる二点、あるいはそれ以上の点から成り、実際に起こった過去の経験を起こった時間的な順に沿って言語表現をすること（筆者訳）」（pp.359-360）と定義されている。ナラティブの能力は、言語能力と密接に関わっており、第二言語学習者にとって、いかに聞き手に分かりやすく物語るか、ということは、困難を極めることが多い。

本研究では、中国語またはタガログ語を母語とする日本語学習者（中学生）を対象に、日本語のナラティブ能力を複数の観点から分析し、第二言語としての日本語の発達の一部を解明することを目的とする。同時に、鈴木・浅野・平川（2014）の日本語母語話者のナラティブデータとの比較も行い、日本語の母語話者と学習者における類似点及び相違点を見出すことも目的とする。

本論文の構成は、以下の通りである。まず第2章で先行研究の概観を行い、第3章では、本研究の研究課題、調査協力者及び研究方法について述べる。第4章では、平均発話長、ナラティブ構造、トピックの導入・維持の3点について、それぞれの調査結果を提示する。そして、第5章では、本研究のまとめ及び今後の課題を述べる。

2. 先行研究

ナラティブ研究では、文字の無い絵本、*Frog, where are you?*（Mayer, 1969）〔以下、Frog story〕を用いたものが多く存在する。研究方法は、Frog storyを調査参加者に見せ、物語の内容を語ってもらい、それを録

音（または録画）し、文字起こしを行って、研究資料としたものである。Frog storyは、各ページ、または見開き2ページに1つの場面が描かれ、合計24の場面で構成されている。登場する人物（または動物）は、主人公の男の子、その男の子が飼っている犬、男の子が飼っているカエル、蜂、プレーリードッグ、フクロウ、ヘラジカ、カエルの家族である。物語の内容は、男の子と犬が寝ている間に飼っていたカエルが逃げ出し、犬と一緒にカエルを探しに行く、というものである。その冒険の中で、いろいろな動物と出会ったり、いろいろな困難に出くわしたりするが、最終的にはカエルの家族と出会い、カエル1匹を連れて帰る、というストーリーである。

以下、2.1. ではナラティブ構造に関する先行研究を概観し、また、2.2. ではトピックの導入・維持に関する先行研究をまとめる。

2.1. ナラティブ構造に関する先行研究

2.1.1. Minami (2004)

Minami (2004) は、Frog storyを用いて、第二言語として日本語を学習している英語母語話者（18名）のナラティブ発達を調査し、日本語母語話者と日本語学習者のナラティブ構造を分析し、その違いと第二言語学習者の特徴を明らかにした。Frog storyを用いて収集したデータを、Action（出来事や登場人物に関する情報）、Orientation（設定、背景）、Evaluation（登場人物の気持ちや評価）、Reported Speech（直接話法の被伝達部）の観点から分析を行った。ナラティブの構造分析の結果、出来事などの前景情報、つまりActionに重点を置く学習者は、Orientation、Evaluation、Reported Speechなどの背景情報を描写しない傾向にあることが分かった。また、日本語学習者は日本語母語話者と比較すると、前景情報をより多く語り、母語話者は背景情報をより多く

語る傾向があることが明らかになった。以上の結果より、ナラティブの構造の割合の変化が、言語習得（発達）過程の評価指標となると示唆している。

2.1.2. Minami (2005)

Minami (2005) は、日本語と英語のバイリンガル児童（40名）のナラティブ能力の分析を行っている。日本語と英語の両方のFrog storyの発話データを収集し、両言語での表現を比較分析している。データ分析の結果、語彙に関しては、一方の言語の語彙が多ければ多いほど、他方の言語での語彙も多く、また、一方の言語での語りの長さが長ければ長いほど、他方の言語でも長くなることが分かった。また、物語りでの語彙数は、日本語よりも英語の方が多く傾向にあることが明らかになった。ナラティブの構造に関して、英語では、時系列にそった前景描写に重点を置いているのに対し、日本語では、話し手や登場人物の気持ちといった評価、つまり感情表現などの背景描写に重点を置いていることが分かった。このような相違点は、バイリンガル児童は、異なる言語でのナラティブにおいて、それぞれの言語の文化的背景にふさわしい伝達能力を獲得しているとしている。これまでのナラティブ研究では、談話構造での言語の普遍性の存在が示されている。それと同時に、それぞれの言語の文化的固有性をも反映し、異なる言語・文化の背景を有する語り手は異なる視点、感情表現、心理的枠組みを用いて言語活動を行うと述べている。

2.1.3. 鈴木・浅野・平川 (2014)

鈴木・浅野・平川 (2014) では、Minami (2004, 2005) の研究手法を参考に、日本語母語話者（小学生、中学生、高校生、大人）を対象

に日本語のナラティブの構造を調べた。ナラティブのデータ収集には、Frog storyを使用し、録音及びCHILDES (Child Language Data Exchange System) の日本語版フォーマット (JCHAT) での入力を行った (Oshima-Takane & MacWhinney, 1995)。データの分析方法は、一文ごとにAction (出来事)、Orientation (設定、背景)、Evaluation (評価、気持ち)、Reported Speech (直接話法の被伝達部) のどれかに分類し、それらの割合を算出した。データ分析の結果、年齢の上昇に伴って、Action、つまり、出来事や話の筋を語る割合の減少、及びEvaluation、つまり、話し手や登場人物の気持ちや評価を語る割合の増加が確認され、このようなナラティブ構造の割合の変化は言語発達に相当すると考えている。

2.2. トピックの導入・維持に関する先行研究

2.2.1. Kajiwara & Minami (2008)

英語のナラティブに関して、Givón (1983) は、「トピックとみなされない指示対象 (referent) は、完全な形の名詞句 (full noun phrase) で言及されるが、トピックとみなされる指示対象には、代名詞 (he, she, itなど) が使われる」と述べている。一方、Hinds (1983) によると、「日本語のナラティブでは、新情報とみなされるものは、名詞句が用いられ、すでにトピックとして確立した指示対象にはゼロ照応、すなわち省略が用いられる」と述べている。以上より、日本語と英語は、トピックの具現化の方法に相違点が多く、日英語のバイリンガル話者のトピックの導入・維持に関する研究を行ったのが、Kajiwara & Minami (2008) である。Kajiwara & Minami (2008) は、日英語のバイリンガル児童を対象に、Minami (2004, 2005) でも用いられたFrog storyを使用して、物語発話でどのようにトピックを導入・維持するかに焦点を当

て、日英両言語での物語りを分析した。分析対象としたトピックは、初登場、2回目の登場、再登場、継続的登場の4種類であった。

データ分析の結果、トピックを表す名詞句の表現に関して、日本語と英語との間に正の相関が確認された。初登場のトピックの場合、日英両言語とも名詞句が使用された。2回目の登場の場合は、日英両言語で名詞句が観察される場合と、英語では代名詞、日本語ではゼロ照応（音声的に具現化されない形）が確認された。再登場の場合、英語では前出のトピックとの構造的な距離によってトピックの表現方法が異なる。距離が近い場合は代名詞、距離が遠い場合は、完全な名詞句になった。日本語での再登場では、代名詞がゼロ照応となる。そして、継続的登場の場合は、英語では代名詞、日本語ではゼロ照応となることが確認された。日本語と英語とでは、表層に現れる言語形式に異なる部分があり、日英語のバイリンガル児童は、このような言語間の相違を理解し、言語を運用していると報告されている。

2.2.2. Chaudron & Parker (1990)

Chaudron & Parker (1990) は、「談話的有標性 (discourse markedness)」と「構造的有標性 (structural markedness)」という2種類の有標性 (markedness) の観点から、日本語を母語とする大学生を対象に英語の名詞句の第二言語習得研究を行った¹。ある言語が有標であるか無標であるかに関しては、多くの研究がなされている。Eckman, Moravcsil, & Wirth (1986) [以下、Eckman et al. (1986)] では、言語の有標・無標の区別には、親近性 (familiarity)、変異性 (variability)、複雑性 (complexity) の3つの側面の対比によるものとされている。山岡

¹ 本研究では、「構造的有標性」は扱わないため、ここでは「談話的有標性」についてのみ言及する。

(1996) は、Eckman et al. (1986) で提案されている3つの側面に関して、「親近性は分布の幅や頻度、変異性は各項目が持つ下位分類の豊かさ、複雑性は形式上の複雑さ」と述べている。つまり、「無標である」ということは、より広く分布し、より入念に下位区分され、より単純な形式を持つということで、「有標である」ということは、分布が限定され、下位区分に乏しく、形式が複雑なものである(山岡, 1996: 9)。

第二言語習得研究に関しても、有標性の概念を用いることがある。つまり、第二言語が母語と比べて無標な構造の場合には習得が促進され、第二言語が母語と比べて有標な構造の場合には習得に困難さが生じるということである(Eckman, 1977、Gass, 1979、White, 1987ほか多数)。

Chaudron & Parker (1990) は、談話文脈(discourse context)の有標性を決めている。名詞句の指示対象を理解することが難しい場合(例えば、談話で新規に登場する人物など)には、より多くの情報が必要となり、より有標な構造や語順が使われる。例えば、名詞や代名詞は、ゼロ照応(名詞や代名詞の省略、つまり音声的に具現化されないこと)に比べて構造的に有標である。以下、表1では、談話の有標性を3種類の談話文脈(継続的なトピックに言及する場合、既知の指示対象をトピックとして言及する場合、新規の指示対象をトピックとして言及する場合)から捉え、右へ行くほどより有標であることを示している。

表1：談話的有標性

無標 (unmarked)	←—————→	有標 (marked)
継続的な指示対象	< 既知の指示対象 <	新規の指示対象

(Chaudron & Parker, 1990: 47, Table 3をもとに改変)

表2では、表1で表された3種類の談話文脈において、トピックに言及する際の名詞句の構造を日本語と英語について表したものである。新規の指示対象を導入する際、英語では不定冠詞 (a/an) を伴い、日本語では格助詞「が」を伴う。また、トピックとして既知の指示対象を導入する場合、英語では定冠詞 (the) を用い、日本語では副助詞「は」を用いる。さらに、ある名詞句が談話のトピックとして継続的に使用される場合には、英語では代名詞を、日本語ではゼロ照応を用いる。

表2：日英語の指示対象と談話的有標性

	継続的な指示対象	既知の指示対象	新規の指示対象
英語	代名詞	定冠詞 (the)	不定冠詞 (a/an)
日本語	ゼロ照応 (ϕ)	名詞句 + 「は」	名詞句 + 「が」

(Chaudron & Parker, 1990: 46, Table 1をもとに改変)

Chaudron & Parker (1990) は、以上のように有標性を定義した上で、成人の日本人英語学習者40名を対象に、トピックの導入・維持に関する調査を行った。データ分析の結果、3つの談話文脈を区別し、適した指示形式を使用していたことが分かった。また、英語のレベルが低い学習者は、どの指示対象の形式においても、無標な指示形式を過剰生成する傾向にあり、単純な構造の習得を経て、複雑な構造の習得が可能になるという、発達段階の存在を示した。

2.2.3. 鈴木・浅野・平川 (2014)

鈴木・浅野・平川 (2014) は、ナラティブ構造の割合に関する研究に加えて、Chaudron & Parker (1990) で提案されている「談話的有標性 (discourse markedness)」に基づくトピックの導入・維持に関する研究

を、日本語母語話者（小学生、中学生、高校生、大人）を対象に行った²。データ分析の結果、どの年代グループでも、3つの談話文脈における指示対象の方法が異なり、期待される言語形式の使用頻度が最も高く、適切な形式を用いていることが示された。また、既知の指示対象で小学生のデータで、構造的に無標である形式（ゼロ照応）の過剰生成と思われる結果が得られた。また、小学生から大人へと日本語の言語能力が上がるにつれ、より有標な言語形式が産出されるようになるという結果も得られたことから、「より有標な談話文脈と結びつく言語形式よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式を過剰に生成する」という予測と一致する結果であった。

3. 本研究

3.1. 研究課題

本研究の研究課題は、以下の通りである。

- I. 平均発話長（MLU）は、初回調査時と追調査時ではどのような変化が生じるのか。
- II. ナラティブ構造に関して、Action、Orientation、Evaluation、Reported Speechのそれぞれの割合はどのように変化するのか。
- III. トピックの導入・維持に関して、3種類の指示対象（継続的、既知、新規）において、トピックとなる名詞句はどのような形で表現されているのか。また、初回調査時と追調査時で、トピックとなる名詞句の表現方法はどのように変化するのか。

² データ収集方法等は、2.1.3.と同様である。

平均発話長（MLU）は調査A、ナラティブ構造については調査B、トピックの導入・維持については調査Cとし、初回調査時と追調査時の変化を追うこととする。また、日本語学習者内でのデータの比較と同時に、日本語母語話者のデータも提示し、日本語母語話者と日本語学習者の類似点・相違点も明らかにする。

3.2. 調査協力者

本研究の調査協力者は、日本の公立中学校に通っている外国籍の子どもであった。協力者の内訳は、中国語を母語とする日本語学習者〔以下、L1Chi〕3名、タガログ語を母語とする日本語学習者〔以下、L1Tag〕3名である。発達過程を観察するために、調査は合計で2回実施した³。追調査は、初回の調査の約1年後に実施した。

日本語学習者と日本語母語話者のデータを比較するために、鈴木・浅野・平川（2014）〔以下、鈴木ほか（2014）〕の日本語を母語とする児童・生徒のデータも用いることとした。日本語母語話者の協力者の内訳は、小学生〔以下、L1Jpn-E〕4名、中学生〔以下、L1Jpn-JH〕6名、高校生〔以下、L1Jpn-SH〕6名であった。表3に、調査参加者の初回調査時の背景情報を記す。また、参考として、日本語母語話者の背景情報も表4に記す。

表3：調査協力者（日本語学習者）の背景情報

	L1Chi	L1Tag
調査協力者数	3	3
平均年齢（年；月 齢）	14；0	14；1
年齢範囲	13；7～14；5	13；8～14；10

³ 実際には、平成22～25年度の2年半の間で、半年ごとに合計5回の調査を実施した。本稿では、1年の期間を経てデータ収集ができた各言語の母語話者3名（L1Chi：3名、L1Tag：3名）のデータに関して報告する。

表4：調査協力者（日本語母語話者）の背景情報

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
調査協力者数	4	6	6
平均年齢（年；月 齢）	9；8	14；11	16；5
年齢範囲	8；2～10；11	13；3～15；7	15；11～17；8

3.3. 調査方法

本研究においても、上述のMinami (2004, 2005)、鈴木ほか (2014) で用いられたFrog storyを使用した⁴。これは、24場面からなる文字の無い絵本で、この絵本を見ながら、調査協力者全員にストーリーを出来るだけ詳しく日本語で話してもらうという課題を与えた。著者のうち1名が、調査協力者に個別に面接し指示を与え、音声を記録した。

実際の手順は、まず絵本の1ページ目から最後まで、1ページずつ目を通し、内容を確認する時間を与えた。時間はおおよそ2分程度であるが、特に時間制限はせず、調査協力者が必要とする時間を十分与えた。その後、絵本を見ながら、出来るだけ詳しくお話をしてほしいという指示を与え、ストーリーを話してもらい、ICレコーダーで音声を記録した。この音声記録を文字起こししたものを資料として使用し、分析を行った。なお、文字化に関しては、CHILDES (Child Language Data Exchange System) の日本語版フォーマット (JCHAT) で入力を行った (MacWhinney, 2000, Oshima-Takane & MacWhinney, 1995)。

4 データ収集にFrog storyを用いたのは、これまでのナラティブ研究の多くでこの絵本が使用されているためである。多くのナラティブ研究のデータは、発話データベースのCHILDESに蓄積されており、追加データとして本研究のデータ提供も視野に入れている。

4. 結果と考察

本章では、3.1. で提示した研究課題に答えるために実施した3種類の調査について、それぞれの結果を述べる。4.1. では平均発話長 (MLU) の変化について、4.2. ではナラティブ構造の割合の変化についての結果を述べ、考察する。4.3. では、トピックの導入・維持についての結果及び考察を述べる。

4.1. 調査A：平均発話長 (mean length of utterances : MLU)

調査協力者のナラティブでの平均発話長 (mean length of utterances) [以下、MLU] を調べ、比較を行った。MLUは、子どもの言語 (文法) 発達の指標とされるもので、一発話内に含まれる単語数や形態素数の平均値のことである。MLUの計算方法は、言語の種類や、対象者の年齢などに応じて、多々提案されている。宮田 (2012) によると、日本語の場合は、「自立語MLU (MLUw)」と「形態素MLU (MLUm)」の、大きく2種類が考えられるとしている⁵。MLUの計算方法の使い分けに関して、宮田 (2012) は、以下のように述べている。

実際にMLUを使用する場合、初期段階 (健常児の場合は2歳～2歳半まで) ではMLUw (自立語MLU) を計算し、その値が1.5を超えた時点で、MLUm (形態素MLU) も計算することが望ましいということだろう。すなわち、文法がすでにある程度進んだ段階 (健常児の場合2歳半以上) ではMLUmを使用することが推奨される。どのような計算法が日本語に一番合ったMLUであるかは今後の研究課題である。(宮田, 2012: 4)

本研究の調査協力者は中学生であり、全員が13歳以上であった。した

⁵ 「自立語MLU (MLUw)」の小文字の「w」は「語 (word)」, また「形態素MLU (MLUm)」の小文字の「m」は「形態素 (morpheme)」の意である。

がって、宮田（2012）が言うように、MLUmを用いるのが適切であると判断し、本研究でもMLUの算出にはMLUmを用いることとした。

発話形態素数を数える際には、言い誤りで訂正された語（句）や、発話の際、考えながら同じ語（句）が繰り返された場合は語数の中に入れていない。また、言い淀んだ場合に発せられる「えっと」などの間投詞（interjection）も含めていない。発話形態素の算出において、厳密な意味での形態素分析を採用するのではなく、登場人物の名前等は1形態素とした。例えば、「カエル」も「カエルくん」も1形態素とし、また、「すると」や「それで」等の接続詞も1形態素とした。

MLUの結果は、以下の表5、表6、図1にまとめてある通りである。L1Chiは、MLUの平均が10.64から14.57に伸び、初回の調査と追調査との間で明らかな変化があることが確認できる。MLUが約4形態素増加しているということは、より長い文を産出できるようになっているということである。このようなMLUの変化は、鈴木ほか（2014）の日本語母語話者のデータとも一致しており、年齢の上昇（認知能力の発達）に伴って、より複雑な文を産出できるようになっているということである。一方で、L1TagのMLUの結果は、L1Chiとは大きく異なっていることが分かる。初回の調査時でのMLUは、L1Chiが10.64、L1Tagが11.31と、L1Tagがやや高い数値ではあったが、大きな差は見られなかった。しかし、追調査では、L1Chiが14.57に伸びていたのに対し、L1Tagは10.89という、初回調査時とほとんど変わらない結果であった。

MLUに関して、L1Chiは発達が確認できたが、L1TagはL1Chiで見られたような発達は確認できなかった。日本語母語話者のデータを見ると、年齢の上昇に伴ってMLUが増加していることから、L1Chiは順調に日本語の習得ができていているものと考えられる。一方で、L1Tagは、何らかの影響で発達が妨げられていると考えられる。

表5：日本語学習者のMLUと標準偏差

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
MLU	10.64	14.57	11.31	10.89
標準偏差 (SD)	3.16	2.06	1.36	2.37

表6：日本語母語話者のMLUと標準偏差

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
MLU	12.67	14.50	19.26
標準偏差 (SD)	2.63	1.96	2.09

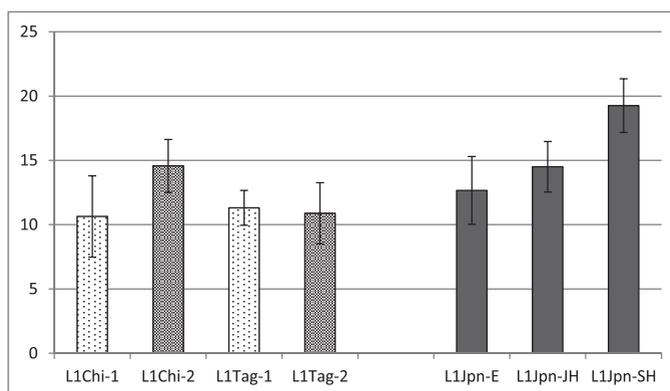


図1：MLUと標準偏差

4.2. 調査B：ナラティブの構造

Minami (2005) では、物語全体の構造に関して、それぞれの文を Action (出来事)、Orientation (設定、背景)、Evaluation (登場人物の気持ちや評価)、Coda (結尾) に分けて分析しているが、本研究で

は、鈴木ほか（2014）と同様に、CodaをOrientationに含め⁶、代わりに Reported Speech（直接話法の被伝達部）を設定し、グループごとにそれぞれを算出し、ナラティブの構造の変化を視覚的に提示する。さらに、日本語母語話者との比較を行うことで、第二言語としての日本語の発達過程と第一言語としての日本語の発達過程の比較を行うことで、ナラティブの構造の発達に関する類似点および相違点を明らかにする。

表7は、日本語学習者のナラティブ構成の割合の平均を示している。また、参考までに、表8では、日本語母語話者のデータを記す。以下、4.2.1. ではAction、4.2.2. ではOrientation、4.2.3. ではEvaluation、4.2.4. ではReported Speechについて、詳細を述べる。

表7：日本語学習者のナラティブ構成の割合（％）

	Action	Orientation	Evaluation	Reported Speech
L1Chi-1 (N=3)	69.89	24.67	5.44	0.00
L1Chi-2 (N=3)	59.91	24.74	11.84	3.51
L1Tag-1 (N=3)	71.87	14.83	12.25	1.04
L1Tag-2 (N=3)	77.09	17.38	4.49	1.04

表8：日本語母語話者のナラティブ構成の割合（％）

	Action	Orientation	Evaluation	Reported Speech
L1Jpn-E (N=4)	68.68	26.13	2.60	2.60
L1Jpn-JH (N=6)	59.63	31.57	8.45	0.35
L1Jpn-SH (N=6)	56.33	25.88	16.50	1.32

（鈴木・浅野・平川, 2014: 106, 表9より）

6 鈴木ほか（2014）に従い、Minami（2005）でのCodaの扱いはOrientationに含めることとした。Codaの表現の例としては、「おしまい」や「～というお話です」等で、これらはナラティブでのOrientation（設定、背景）の一部であると考えられるためである。

4.2.1. Actionの割合

以下の表9、表10、図2は、日本語学習者及び日本語母語話者のAction（出来事）の割合の平均と標準偏差（standard deviation：SD）を示したものである。Actionの発話例としては、「カエルが瓶から逃げました」「少年と犬が外に行って…」等が挙げられる。

L1Chiは、追調査時では約10%の減少が確認できた一方で、L1Tagは約6%の増加が確認された。鈴木ほか（2014）の日本語母語話者のデータでは、年齢の上昇に伴ってActionの割合が減少していることから、L1Chiは日本語母語話者と同様の発達過程を経ていると考えることが出来る。Actionが減少した部分に関しては、4.2.3. で言及する。

表9：日本語学習者のActionの割合（平均（%）と標準偏差）

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
割合の平均	69.89	59.91	71.87	77.09
標準偏差 (SD)	4.48	3.30	4.82	9.28

表10：日本語母語話者のActionの割合（平均（%）と標準偏差）

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
割合の平均	68.68	59.63	56.33
標準偏差 (SD)	6.85	9.62	6.88

（鈴木・浅野・平川, 2014: 106, 表10より）

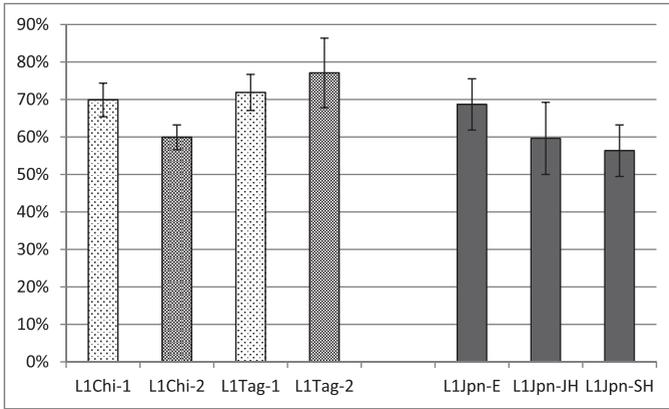


図2：Actionの割合（平均（%）と標準偏差）

4.2.2. Orientationの割合

表11、表12、図3は、Orientation（設定、背景）の割合の平均と標準偏差を示したものである。Orientationの発話例としては、「その夜、子どもは寝ている間に…」 「子どもが朝起きたとき…」等が挙げられる。

L1Chiは、初回調査時が24.67%で追調査時が24.74%と、ほとんど変化は見られなかった。L1Tagは、14.83%から17.38%と、約2.5%の割合の増加が確認できた。L1ChiとL1Tagを比較すると、L1Chiの方がL1TagよりもOrientationの割合が約10%高いことが確認できる。日本語母語話者と比較してみても、L1TagはOrientationの割合が低いことが分かる。

表11：日本語学習者のOrientationの割合（平均（%）と標準偏差）

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
割合の平均	24.67	24.74	14.83	17.38
標準偏差 (SD)	8.35	16.84	6.64	7.50

表12：日本語母語話者のOrientationの割合（平均（％）と標準偏差）

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
割合の平均	26.13	31.57	25.88
標準偏差 (SD)	4.85	6.02	5.22

(鈴木・浅野・平川, 2014: 107, 表11より)

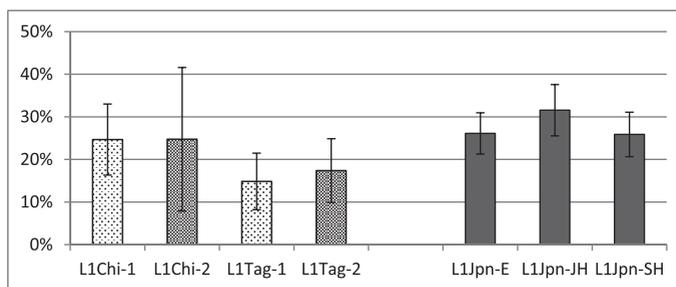


図3：Orientationの割合（平均（％）と標準偏差）

4.2.3. Evaluationの割合

表13、表14、図4は、Evaluation（評価あるいは話し手や登場人物の気持ち等）の割合の平均と標準偏差を示している。Evaluationの発話例としては、「悲しかった」「少年がちょっと怒って…」等が挙げられる。

L1ChiはEvaluationの割合が5.44%から11.84%に増加しているのに対し、L1Tagは12.25%から4.49%に減少していることが確認できる。日本語母語話者は、年齢の上昇に伴いEvaluationの割合が増加していることが示されているので、L1Chiは日本語母語話者と同様の発達傾向にあると考えられる。

表13：日本語学習者のEvaluationの割合（平均（％）と標準偏差）

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
割合の平均	5.44	11.84	12.25	4.49
標準偏差 (SD)	4.72	10.18	5.67	3.95

表14：日本語母語話者のEvaluationの割合（平均（％）と標準偏差）

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
割合の平均	2.60	8.45	16.50
標準偏差 (SD)	3.18	5.51	3.97

(鈴木・浅野・平川, 2014: 109, 表12より)

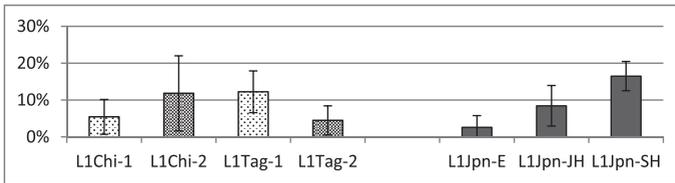


図4：Evaluationの割合（平均（％）と標準偏差）

4.2.4. Reported Speechの割合

表15、表16、図5は、Reported Speech（直接話法での被伝達部分に当たる表現）の割合の平均と標準偏差を示している。Reported Speechの発話例としては、「カエルはここにいるかな」「おーい、カエルはどこだ」等が挙げられる。

全てのグループにおいて、ナラティブ構造全体におけるReported Speechが占める割合は、高くは無いが、L1Chiに関しては、発達と思われる数値が確認できる。L1Chiの初回調査時のReported Speechの割合

は0%だったが、追調査時には3.51%まで増加している。L1Tagは初回調査時も追調査時も、Reported Speechの割合は変化していない。

表15：日本語学習者のReported Speechの割合（平均（%）と標準偏差）

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
割合の平均	0.00	3.51	1.04	1.04
標準偏差 (SD)	0.00	6.08	1.80	1.80

表16：日本語母語話者のReported Speechの割合（平均（%）と標準偏差）

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
割合の平均	2.60	0.35	1.32
標準偏差 (SD)	3.18	0.86	1.30

(鈴木・浅野・平川, 2014: 110, 表13より)

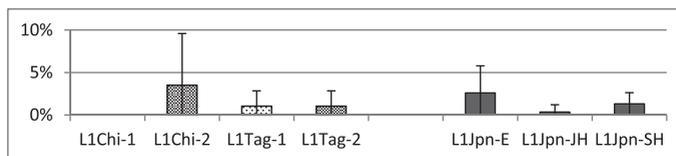


図5：Reported Speechの割合（平均（%）と標準偏差）

4.2.5. ナラティブ構造のまとめ

図6は、グループごとのナラティブ構造の割合の平均である表7および表8を棒グラフで示したものである。鈴木ほか（2014）には、「日本語母語話者は、年齢の上昇に伴ってActionの割合が減少する一方で、Evaluationの割合の増加が確認できた」（p.112）とあり、Minami（2004）の結果とも合致していた。Actionの割合はEvaluationの割合に移行していると考えられている。

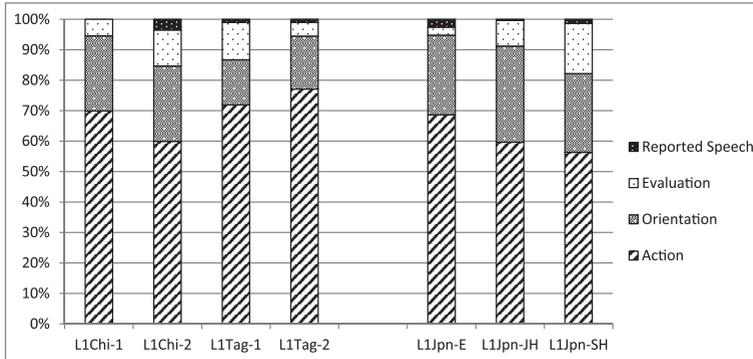


図6：ナラティブ構造の割合（%）

本研究において、日本語学習者は、学習者の母語によってナラティブ構造の変化の仕方が違うことが分かった。L1Chiは、Actionの減少に伴ってEvaluationの増加が確認できたので、日本語母語話者と似た発達段階を経ていることが確認できた（Minami, 2004、鈴木ほか, 2014）。また、Orientationの割合も日本語母語話者とほぼ同等の割合であった。L1Tagについては、L1Chiと異なる振る舞いをしている点が確認された。Actionの割合は減少するのではなく増加し、それに伴い、Evaluationの割合は減少していた。この結果は、L1Chi及び日本語母語話者とは反対の結果であった。また、Orientationの割合についても、L1Chiも日本語母語話者も少なくとも25%は占めているのに対し、L1Tagは15%前後であり、大きな差があることが分かる。

MLUとナラティブ構造との関わりを見てみると、MLUの増加が確認できた場合、つまり、日本語母語話者とL1Chiのデータにのみ、Actionの減少及びEvaluationの増加が確認できた。L1Tagは、MLUの増加は確認できず、ActionとEvaluationの変化も日本語母語話及びL1Chiとは異なるものであった。このような結果は、浅野・平川（2013）の「MLU

の増加とともに、母語話者のナラティブ構造に近くなる」(p.20) という、日本語を母語とする英語学習者のデータとも合致する。

4.3. 調査C：「有標性」の観点からのトピック導入・維持

Chaudron & Parker (1990) に基づき、談話的有標性 (discourse markedness) の観点から、ナラティブを分析する。特に、3つの談話文脈 (継続的な指示対象、既知の指示対象、新規の指示対象) におけるトピックの導入・維持について、トピックとなる名詞句の表現方法に焦点を当て、分析を行った。構造の分類については、ゼロ照応、名詞句+助詞 (N+P)、修飾語+名詞句+助詞 (M+N+P) の3つに分類し、表出頻度を報告する。調査Cでは、日本語母語話者を対象とした日本語のトピック導入・維持の研究 (鈴木ほか, 2014) 同様に、Chaudron & Parker (1990) に従って、以下に挙げる予測を検証することを目的に分析を行った。

- (1) 言語レベルが上がるにつれて、より有標な言語形式が産出される。
- (2) より有標な談話文脈と結びつく言語形式よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式を過剰に生成する。
- (3) 3種類の談話文脈ごとに、異なる言語形式を使用する。

予測 (1) は、言語レベルの上昇に伴って、より有標な言語形式が使用されうるということである。2.2.2. の表1より、継続的な指示対象に言及することは最も無標であり、新規の指示対象を導入するには、継続的な指示対象よりも多くの情報を提示する必要があるため、最も有標であるとされている。既知の指示対象とは、一度談話のトピックから外れたものを再度導入されたもののことをいう。

予測（2）は、より有標な談話文脈と結びつく言語形式、つまり「N+P」よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式、つまりゼロ照応を過剰に生成する、ということである。予測（1）でいう、「言語レベルが上がるにつれて、より有標な言語形式が産出される」とは、つまり、言語レベルが低い間は、最も無標な言語形式であるゼロ照応の過剰生成が確認できる可能性がある、ということである。

予測（3）に関しては、3つの談話文脈（継続、既知、新規）ごとに、それぞれ適した言語形式でトピックとなる名詞句を具現化するということである。トピックが継続している場合、そのトピックに対して毎回言及する必要はなく⁷、ゼロ照応（音声的に具現化しないこと）が望ましいとされている。また、トピックが既知の場合には、トピックの再焦点化が必要になるので、「N+P（は）」の言語形式が望ましい。既知のトピックに対してゼロ照応を用いると、聞き手は話し手がどのトピックに対して言及しているのかが分からなくなってしまう。そして、トピックが新規の場合は、今まで無かった新たなものに言及するので、「N+P（が）」の言語形式が最も望ましい形である。

まず全体的な結果について述べる。表17、表18、および図7は、トピックと判断される指示対象を表す際にどのような形式が使われたのかを、産出頻度（各グループにおける総数を100%とし、3つの名詞句の産出頻度を計算）で表したものである。

7 継続的なトピックに対して、毎回当該トピックを音声的に具現化することは、文法的には容認可能であるが、不自然な談話になる可能性が高くなる。

表17：日本語学習者の指示形式の産出頻度（％）

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
ゼロ照応（ ϕ ）	40.98	34.07	29.55	33.33
N+P	57.38	61.54	70.45	66.67
M+N+P	1.64	4.40	0.00	0.00

表18：日本語母語話者の指示形式の産出頻度（％）

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
ゼロ照応（ ϕ ）	45.13	27.07	19.43
N+P	53.98	62.41	76.78
M+N+P	0.88	10.53	3.79

（鈴木・浅野・平川, 2014: 99, 表4より）

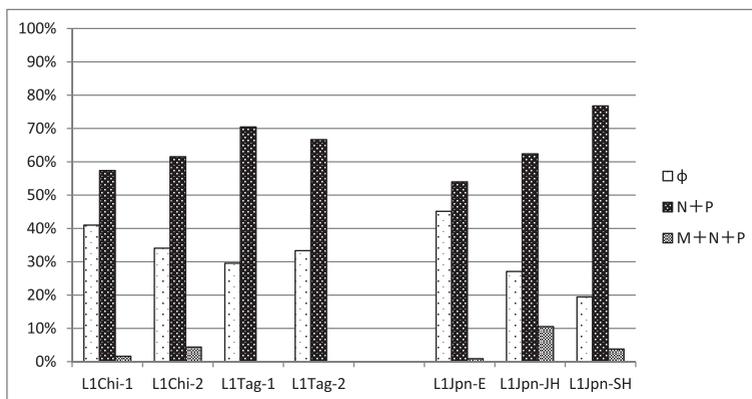


図7：指示形式の産出頻度

まず、鈴木ほか（2014）の日本語母語話者のデータを見てみると、表18、図7より、最も無標な形式であるゼロ照応が、若い年代で多く産出され、年代が上がるにつれて、より有標な形式である「N+P」や「M+N+P」が増加する傾向にあることが確認できる。具体的に、L1Jpn-Eは、絵本に登場する指示対象に言及する際のゼロ照応の割合が45.13%であるが、L1Jpn-JH、L1Jpn-SHと年代が上がるにつれてゼロ照応の割合は27.07%、19.43%と減少している。その一方で、「N+P」の比率は53.98%、62.41%、76.78%と増加している。これは、上述した予測（1）、「言語レベルが上がるにつれて、より有標な言語形式が産出される」と一致する結果である。

日本語学習者の結果は、L1ChiとL1Tagで異なった振る舞いをしていることが分かる。L1Chiは、ゼロ照応が40.98%から34.07%に減少し、「N+P」が57.38%から61.54%に増加している。これは、日本語母語話者のデータ（鈴木ほか、2014）とも合致し、この結果は予測（1）と合致する。しかし、L1Tagは、ゼロ照応に関して、初回調査時が29.55%で追調査時が33.33%、「N+P」に関して初回調査時が70.45%で追調査時が66.67%と、特に目立った変化は確認できなかった。この結果は、L1Chi及び日本語母語話者の結果（鈴木ほか、2014）とは異なり、予測（1）と一致しない結果となった。

以下、4.3.1. では継続的な指示対象について、4.3.2. では既知の指示対象について、そして4.3.3. では新規の指示対象について、日本語学習者がトピックとなる名詞句をどのような言語形式で表現したのかについて詳しく述べる。

4.3.1. 継続的な指示対象

以下の表19、表20および図8では、継続的な指示対象の談話文脈でのトピックの指示形式の産出頻度を示している。

表19：継続的な指示対象に関する指示形式の産出頻度 (%) (日本語学習者)

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
ゼロ照応 (φ)	88.89	100.00	100.00	83.33
N+P	11.11	0.00	0.00	16.67
M+N+P	0.00	0.00	0.00	0.00

表20：継続的な指示対象に関する指示形式の産出頻度 (%) (日本語母語話者)

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
ゼロ照応 (φ)	76.74	52.27	64.71
N+P	23.26	40.91	33.33
M+N+P	0.00	6.82	1.96

(鈴木・浅野・平川, 2014: 100, 表5より)

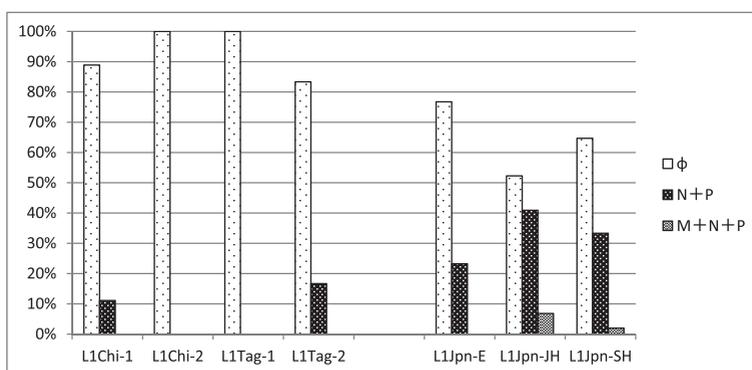


図8：継続的な指示対象に関する指示形式の産出頻度

トピックが継続している場合、そのトピックは、談話文脈上では最も無標である。したがって、既に確立したトピックに言及する際、日本語ではゼロ照応を用いるのが自然である。鈴木ほか（2014）の日本語母語話者のデータ（表20及び図8）より、どのグループもゼロ照応の割合が50%以上を占めており、名詞句の使用よりも割合が高いことが分かる。

表19及び図8より、日本語学習者の結果は、すべての調査で80%以上であり、日本語母語話者の結果と同様に、ゼロ照応を多く使用していることが分かる。この結果は、予測（3）を支持し、継続的な指示対象にはゼロ照応を使用する、という談話文脈ごとの言語形式の使い分けができていていると考えることが出来る。

4.3.2. 既知の指示対象

以下の表21、表22および図9では、既知の指示対象の談話文脈でのトピックの指示形式の産出頻度を示している。

表21：既知の指示対象に関する指示形式の産出頻度（%）（日本語学習者）

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
ゼロ照応（ ϕ ）	51.12	30.40	33.20	39.40
N+P	44.72	64.86	66.80	60.60
M+N+P	4.17	4.74	0.00	0.00

表22：既知の指示対象に関する指示形式の産出頻度（%）（日本語母語話者）

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
ゼロ照応（ ϕ ）	37.50	20.34	6.30
N+P	62.50	72.88	89.76
M+N+P	0.00	6.78	3.94

（鈴木・浅野・平川, 2014: 101, 表6より）

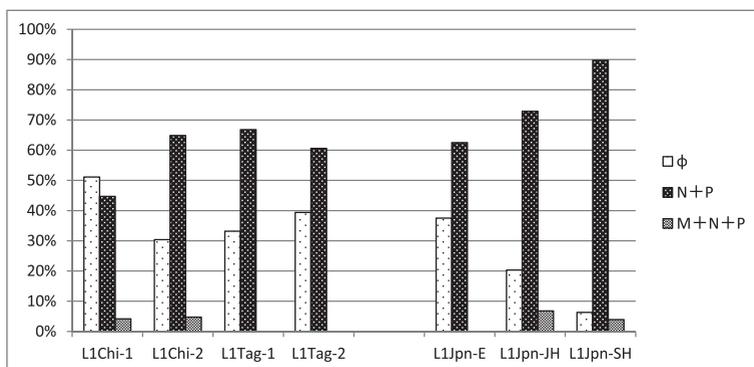


図9：既知の指示対象に関する指示形式の産出頻度

トピックが既知の指示対象である場合、既に談話に登場している人物であっても、談話文脈上ではトピックとして新たに焦点化されるため、名詞句（「N+P（は）」）の使用が適切と考えられる。鈴木ほか（2014）の日本語母語話者のデータ（表22及び図9）から明らかのように、どのグループでも名詞句（「N+P（は）」）の使用頻度がゼロ照応を上回っていることが分かる。また、「N+P（は）」使用の割合は、年代が上がるにつれて、62.50%、72.88%、89.76%と増加していることも確認できる。

表21及び図9より、L1Chiの初回調査時には、ゼロ照応（51.12%）と「N+P（は）」（44.72%）を混同していると思われる結果であったが、追調査では、「N+P（は）」の使用（64.86%）が、ゼロ照応の使用（30.40%）を大きく上回っていることが確認できる。この結果は、予測（1）、（2）、（3）すべてを支持する。つまり、追調査時には、無標な言語形式であるゼロ照応の過剰生成が減少し、より有標な言語形式である「N+P（は）」の使用頻度が増加していること、さらに、追調査時には、「N+P（は）」の使用がゼロ照応を大きく上回り、「N+P（は）」の

使用を好んでいる。つまり、既知の指示対象には「N+P (は)」の使用が適切であるということに気づいていると考えられる。L1Tagの結果は、L1Chiの結果とは傾向が異なっていた。L1Tagのゼロ照応及び「N+P (は)」の使用については、特に目立った変化は確認できなかった。この結果より、既知の指示対象に関するL1Tagのデータは、予測 (1)「言語レベルが上がるにつれて、より有標な言語形式が産出される」と一致していないことが分かる。しかし、既知の指示対象に言及する際の「N+P (は)」の使用は、初回調査時も追調査時も65%以上であることから、予測 (3) と一致する結果であった。

4.3.3. 新規の指示対象

以下の表23、表24および図10では、新規の指示対象の談話文脈でのトピックの指示形式の産出頻度を示している。

表23：新規の指示対象に関する指示形式の産出頻度 (%) (日本語学習者)

	L1Chi-1	L1Chi-2	L1Tag-1	L1Tag-2
ゼロ照応 (φ)	0.00	0.00	0.00	0.00
N+P	100.00	87.78	100.00	100.00
M+N+P	0.00	12.22	0.00	0.00

表24：新規の指示対象に関する指示形式の産出頻度 (%) (日本語母語話者)

	L1Jpn-E	L1Jpn-JH	L1Jpn-SH
ゼロ照応 (φ)	0.00	3.33	0.00
N+P	95.45	73.33	93.94
M+N+P	4.55	23.33	6.06

(鈴木・浅野・平川, 2014: 102, 表7より)

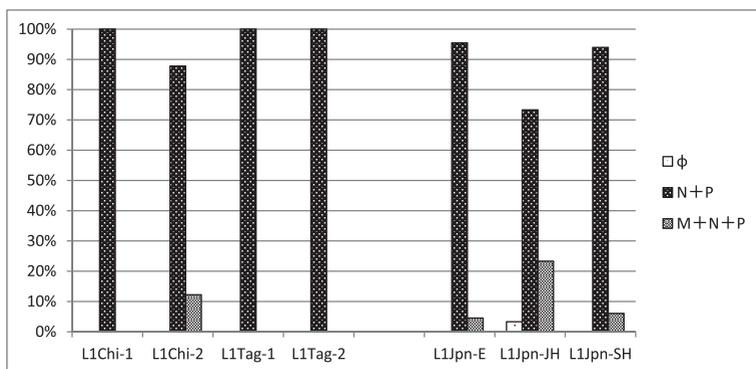


図10: 新規の指示対象に関する指示形式の産出頻度

トピックとして新しい指示対象に言及する場合、談話文脈上、最も有標であり、名詞句（「N+P（が）」）の使用が必要となる。鈴木ほか（2014）の日本語母語話者のデータ（表24及び図10）、日本語学習者のデータ（表23及び図10）から明らかなように、新規の指示対象に対しては、95%以上の割合で、「N+P（が）」で具現化できていることが分かる。日本語母語話者の場合には、形容詞や連体修飾語などを伴った、より複雑な言語形式でトピックを導入していることが確認できた。L1Chiでも、日本語母語話者同様に、より複雑な言語形式の使用ができるようになっていくことが分かる。L1Tagは、修飾語等を伴った形式は産出できていないが、初回調査時も追調査時も100%の割合で「N+P（が）」を用いてトピックを導入している。これより、L1Chiについては、予測（1）「言語レベルが上がるにつれて、より有標な言語形式が産出される」と一致し、L1ChiとL1Tagの両方については、予測（3）、つまり、新規の指示対象を導入する際には「N+P（が）」の言語形式を適切に使用できている、ということと一致する。

4.3.4. トピック導入・維持のまとめ

以上より、調査Cのデータの分析結果は、各予測と概ね合致していた。予測（1）「言語レベルが上がるにつれて、より有標な言語形式が産出される」については、既知の指示対象及び新規の指示対象におけるL1Chiのデータが示している。既知の指示対象において、L1Chiはゼロ照応が大きく減少し、「N+P（は）」の使用に移行できていた。また、新規の指示対象において、L1Chiは、より複雑な修飾語を用いた言語形式でトピックを導入できるようになっていた。

予測（2）「より有標な談話文脈と結びつく言語形式よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式を過剰に生成する」に関しては、既知の指示対象におけるデータで示されている。既知の指示対象におけるL1Chiのデータで、初回調査時にはゼロ照応と「N+P（は）」を混同していると思われる点が確認できた。

予測（3）に関しては、両日本語学習者ともに、各指示対象における最も適切な言語形式を使用できていた。つまり、継続的な指示対象にはゼロ照応を、既知の指示対象には「N+P（は）」を、新規の指示対象には「N+P（が）」をそれぞれ適切に使用できていた。

調査Cにおいて、L1Chi及びL1Tagのナラティブにおけるトピック導入・維持に関する傾向は概ね明らかにすることが出来た。しかし、調査協力者が少ないこと、L1ChiとL1Tagとで振る舞いが異なっている点に関しては、現段階では説明ができない。これらについては、今後の課題として取り組んでいく予定である。また、中国語及びタガログ語の名詞句や代名詞などに関する言語理論研究を行うことで、学習者の母語が第二言語習得に与える影響を解明できる可能性がある。

5. おわりに

本研究では、中国語・タガログ語を母語とする日本語学習者を対象としたナラティブの発達過程について、以下の3点が明らかになった。

- ① MLUの発達に関して、L1Chiは増加傾向にあるが、L1Tagは大きな変化は確認できなかった。日本語母語話者は、年齢の上昇（認知能力の発達）に伴ってMLUが増加することから（鈴木ほか, 2014）、MLUに関しては、L1Chiは日本語母語話者と同様の発達過程であるが、L1Tagは何らかの影響で発達が妨げられていると考えられる。
- ② ナラティブの構造において、L1Chiは、日本語母語話者と同様に、Action（出来事）の割合の減少と同時にEvaluation（評価や登場人物の気持ち）の割合の増加が確認できた（Minami, 2004、鈴木ほか, 2014）。これより、L1Chiは日本語母語話者と同様の発達段階をえていると考えられる。このような発達は、MLUの発達とも関係していると考えられる。しかし、L1TagはActionの増加と同時にEvaluationの割合が減少しており、また、MLUの発達も確認できなかったため、大きな発達はしていないものと考えられる。
- ③ トピックの導入・維持に関して、それぞれの談話文脈での指示対象（継続、既知、新規）に応じて適した言語形式を使用できており、追調査時にはより正確に適切な言語形式の使用ができていた（Chaudron & Parker, 1990、鈴木ほか, 2014）。特に既知の指示対象において、無標な言語形式（ゼロ照応）の過剰生成を経て有標な言語形式（N+P）の使用が出来るようになるという、L1Chiの明らかな発達が確認できた。しかし、L1Tagには、発達と思われる箇所は確認できなかった。

以上、中国語・タガログ語を母語とする日本語学習者のナラティブ発達過程の一端を、日本語母語話者のデータとの比較を通して明らかにした⁸。本研究のデータ数は非常に限られているため、今後は、さらにデータ数を増やし、より信頼性の高い研究を行っていく。そして、日本語を第二言語として学習する学習者のナラティブ発達の指標とすることを目的として、更なる詳細な分析や新たな分析方法を取り入れた研究も行うことで、日本語教育の一端に貢献できると考える。本研究で扱ったデータは、日本語学習者の日本語のデータであった。今後は、本研究の調査協力者の母語である中国語及びタガログ語の名詞句周辺に関する研究、代名詞に関する研究等の言語理論に関する研究を行うことで、学習者の母語が第二言語習得に与える影響等、本研究で明らかにできなかった事象に関しても、解明できる可能性がある。さらに、田浦（2014）は「二言語使用者（バイリンガル）の両言語のナラティブを分析することで、新たな知見が得られる可能性がある」（pp.75-76）と述べている。例えば、本研究の調査協力者の母語である中国語やタガログ語のナラティブ能力の発達に関する研究も併せて実施することで、日本語と母語の両言語の発達や母語の喪失など、新たな発見がある可能性がある。今後は、二言語使用者を対象とした両言語のナラティブ能力の発達も視野に入れて研究を進めていきたい。

謝辞

本研究は、文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所の給費研究費（平成26年度）の助成を受けたものである。また、本研究は、第

8 本研究の日本語母語話者のデータは横断的なデータ、日本語学習者のデータは縦断的なデータであった。横断的研究と縦断的研究を比較することの妥当性に関しては、研究方法を改善するためにも、今後の課題として取り組む予定である。

三著者へ対する独立行政法人学術振興会の科学研究費補助金、平成22～25年度基盤研究（B）『第二言語習得過程における文法の発達と喪失に関する理論的・実証的研究』（課題番号：22320109、研究代表者：平川真規子）、及び平成26～28年度基盤研究（B）『継承語および第二言語の習得における通言語的影響に関する理論的・実証的研究』（課題番号：26284081、研究代表者：平川真規子）の助成も受けている。

本論文の作成において、第16回言語学会年次国際大会のポスター発表について有益なコメントをくださった査読者及び学会参加者の方々、データ収集に協力してくださった調査参加者の皆様、音声データの文字化に協力してくださった四谷厚子氏に、この場を借りて感謝の意を表す。

参考文献

- 浅野明代・平川真規子（2013）「日本人英語学習者と英語母語話者のナラティブ構造に関する一考察」『言語と文化』25, 1-23. 文教大学大学院附属言語文化研究所.
- 鈴木一徳・浅野明代・平川真規子（2014）「日本語母語話者のナラティブ構造に関する一考察」『言語と文化』26, 87-115. 文教大学大学院附属言語文化研究所.
- 田浦秀幸（2014）「読み・書き・語る能力の発達」山本雅代（編著）『バイリンガリズム入門』（pp.67-77）. 大修館書店.
- 宮田Susanne（2012）「日本語MLU（平均発話長）のガイドライン—自立語MLUおよび形態素MLUの計算法—」『健康医療科学研究』2, 1-17. 愛知淑徳大学.
- 山岡俊比古（1996）「言語の有標性と言語習得」『言語表現研究』12, 9-18. 兵庫教育大学.

- Chaudron, Craig. & Parker, Kate. (1990) Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrase. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 43-64.
- Eckman, Fred. (1977) Markedness and the contrastive analysis hypothesis. *Language Learning*, 27, 315-330.
- Gass, Susan. (1979) Language transfer and universal grammatical relations. *Language Learning*, 29, 327-344.
- Eckman, Fred., Moravcsil, Edith., & Wirth, Jessica. (eds.) (1986) *Markedness*. New York: Plenum Press.
- Givón, Talmy. (ed.) (1983) *Topic continuity in discourse: Quantitative cross-language studies*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hinds, John. (1983) Topic continuity in Japanese. In T. Givón (ed.), *Topic continuity in discourse: Quantitative cross-language studies*. (pp.43-93). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Kajiwara, Makiko. & Minami, Masahiko. (2008) Narrative construction by bilingual children: Referential topic management. *Studies in Language Sciences*, 7, 79-90.
- Labov, William. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- MacWhinny, Brian. (2000) *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*. 3rd edition. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Mayer, Mercer. (1969) *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- Minami, Masahiko. (2004) The development of narrative in second language acquisition: Frog stories. *Studies in Language Sciences*, 3, 123-138.
- Minami, Masahiko. (2005) Keeping Japanese alive: Narrative discourse

skills in English-Japanese bilingual children. *Studies in Language Sciences*, 4, 149-164.

Oshima-Takane, Yuriko. & MacWhinney, Brian. (1995) *CHILDES manual for Japanese*. Montreal: McGill University/ Nagoya: Chukyo University.

White, Lydia. (1987) Markedness and second language acquisition: The question of transfer. *Studies in Second Language Acquisition*, 9, 261-285.